清水幾太郎にとって戦後民主主義とは何であったのか。

土　倉　莞　爾

目　　次

はじめに
Ⅰ．日本の戦後民主主義について考える
Ⅱ．戦後日本における清水幾太郎の思想と行動
Ⅲ．『ジャーナリズム』について
Ⅳ．『倫理学ノート』について
参考文献

はじめに

2021年１月８日付『日本経済新聞』コラム「春秋」には，次のような文章が載っている。一部引用しよう。

「今こそ国会へ行こう」。1960年安保闘争のとき，社会学者の清水幾太郎は雑誌に寄せた論文で，しきりに直接行動を呼びかけた。「手に請願書を携えた日本人の群れが国会議事堂を幾重にも取り巻いたら，そこに，何物も抗し得ない政治的実力が生まれてくる」おびただしい数の人々が国会を包囲した背景のひとつには，こうした言説があったろう。やがてデモ隊は国会の敷地内に乱入し，混乱のなかで東大の女子学生が命を落とす。その直前には，羽田に着いた米報道官の車を群衆が立ち往生させる事件も起きている。予定されていたアイゼンハワー大統領の訪日は中止となった。戦後15年の日本の混迷を，米国は冷ややかに見つめていたに違いない。

ここから，「春秋」子の議論は一転する。引用を続けたい。

ところがいま，そんな民主主義の国が往時の日本どころではない騒ぎのなか

にある。トランプ大統領の支持者が暴徒化し，連邦議会議事堂を一時占拠した。複数の死者も出ているという。「議会へ行こう」と乱入をあおったのはトランプ自身である。かつての日本は危機にひんしながらモードを切り替え，経済の時代に入った。声高の先生たちも静かになった。空気ががらりと変わったのだ。しかし現在の米国にそういう道が開けるかどうか。ここまで深い分断を埋めるのは至難の業だ。

以上で引用は切り上げるが，箇条書きふうに，コラム「春秋」に対する筆者の見解をのべてみたい。

第１に，「日本は危機にひんしながらモードを切り替え，経済の時代に入った。声高の先生たちも静かになった」についてであるが，これが紙面に書かれたのは2021年だが，日本の経済は円安で混迷して来ているのではないか。次に「声高の先生たち」とはどういう意味か。私見では，むしろ，今は，右翼のほうから「声高の先生たち」の大声が聞える時代となったと言ってみたい。

第２に，「現在の米国にそういう道が開けるかどうか。ここまで深い分断を埋めるのは至難の業だ」について言えば，コラム「春秋」子には米国批判が非常に強いように思われる。しかし，それは好いとしても，日本と対比的に批判するように論じているところが気になる。

第３に，「空気ががらりと変わったのだ」については，果たしてそう言ってよいのかどうか，そしてその意味するところは何なのか気になるところである。

第４に，最後に，コラム「春秋」を「はじめに」のところで，とりあげた理由になるのだが，このコラム「春秋」を読むと，まるで，清水幾太郎とトランプを類似しているかのように読めるからである。たしかに，清水とトランプは，デマゴーグ，あるいは扇動家的であることは事実であると言えよう。とはいえ，トランプはやくざな政治家であり，それに比べれば，清水は，本当のところは学者であるということが言えるのではないかと思う。トランプと比較されるべきは安保のときの首相だった岸信介であろう。

そこで，何が言いたいかと言えば，トランプと同一視されることは，清水にとって迷惑なことかもしれないが，清水には，今にして思えば，ポピュリスト

の側面があった。それは表面的なことではなく，深部，すなわち思想家として，あるいは知識人としてそうだったのではないか，と考えてみたいと筆者はひそかに考えている。以下の論述はそのような観点からなされることをここでお断りしておきたい。

Ⅰ．日本の戦後民主主義について考える

評論家寺島実郎によれば，日本においては，1945年の敗戦後，「戦後民主主義」が唐突に持ち込まれ，日本人は改めて「資本主義と民主主義は相関していること」を認識させられた。戦前の明治期日本にも，資本主義と民主主義は一定の意味において存在した。（中略）だが，資本主義と民主主義の相関という観点からすれば，明治期の日本のそれはあまりに歪んでいた（寺島 2022，70-1）。

寺島は言う。資本主義はいかなる方向に向かうのか。資本主義の現局面と進路を再考するうえで，参考になるのは，イマニュエル・ウォーラーステイン Immanuel Wallerstein の『史的システムとしての資本主義』（ウォーラーステイン，2022）である。（中略）ウォーラーステインは一貫して資本主義というシステムが内在させる問題，とくに「万物の商品化」と「資本の自己増殖」を批判的に論じてきた。その視界の中で，「21世紀の資本主義」についての「将来見通し」として「高度に分権化，平等化された秩序」を志向する世界潮流に資本主義システムが耐えられるのかという問題意識を語っている（同，72-3）。

このことが，戦後日本の経済成長後の「戦後民主主義」に密接に関わってくる。寺島は次のように論じる。

何よりも日本人自身が責任をもって向き合わなければならない課題は，日本の資本主義と民主主義をどうするのかである。そのことは，敗戦を機に占領政策を受容する形で動き始めた「戦後民主主義」と「戦後日本型経済産業構造」の在り方について，根底から再考し，主体的に再構築することを意味する（74）。

寺島の発想は，「戦後民主主義」と「戦後日本経済構造」を繋いで構想することにあるようであるが，清水幾太郎の思考の枠組みには重ならないように思

われる。しかしながら，日本の「戦後民主主義」は戦後日本の「経済復興」と踵を合わすように出発し，変容していったということができるので，寺島の言説は，清水の思想を論じるうえで参考になると思われる。

さて，社会思想史学者の酒井隆史は，「わたしたちがある時期までまだ頻繁に接していた負の記号としての戦後民主主義が，正の記号に転倒してきたという空気は感じられる」（酒井 2022，86）と言う。酒井によれば，もちろん，あいかわらず「ネトウヨ」を筆頭に，保守派や右翼は，「戦後民主主義」を負の記号として的にかけ，糾弾しつづけるであろう。しかし，そうでない側からの「戦後民主主義」に対する激しい批判は息を潜め，ほぼ正の価値をもって語られつつあるようにみえる（同，86）。

「そうでない側」とは，革新派や左翼ということになるのだが，たしかに革新派や左翼は「戦後民主主義」を批判しなくなった。その点は同意したい。

酒井は言う。丸山眞男によれば，「戦後民主主義批判」はたいてい「戦後政治批判」である。（中略）戦後政治という「現実」が，そのまま戦後民主主義であり，さらに高度成長以降の過程がひたすら民主主義の制度化の過程であるとするなら，戦後民主主義を「否定するのは当たり前だと思うんだな，僕は，心情的に」（88）と述べたそうであるが，問題の核心をついていると思われる。

しかしながら，酒井は次のように，丸山に批判的である。

すなわち，丸山は，デモスの力能，しかも制度を溶解させる力能がデモクラシーの核心であるという程度には，デモクラティストであり「アナキスト」ですらあった。しかし，デモスがよりよくデモクラシーを実現させる制度を創発するかもしれない，あるいはすでにしているのかもしれない，という積極的力能にはふれない程度には，やはりエリート主義者であり，「体制派」であった（92）。

ここで，本稿の主題のモデルとなっている清水幾太郎に言及すれば，清水は，対照的に，エリート主義者や体制派ではなかったと言ってよいのだろうか。そこはむずかしいところである。とはいえ，図式的には，丸山や鶴見俊輔と清水は，比較しながら論じてみることも許されるのではないだろうか。

Ⅱ．戦後日本における清水幾太郎の思想と行動

社会学者小熊英二によれば，清水幾太郎は，太平洋戦争よりも関東大震災のほうが重い体験だったと述べており，転向や戦争協力に一定の反省はあったものの，鶴見俊輔や丸山眞男のような戦後知識人たちほどには重い悔恨を持っていなかった。（中略）「庶民的」な意識の持ち主だった清水が，丸山眞男が重視した「治者」の責任意識などとは無縁だったことがあったようである（小熊2003，30）。

小熊は戦後初期の清水と丸山を対比して次のように述べる。

回想記『わが人生の断片』で，清水はおそらく丸山などを意識して，こう述べている。「私などは，何処から見ても，芸人の部類であった」「フリーのジャーナリストの立場から考えて羨ましく見える，というより，憎らしく見えるのは，大学の，特に官立大学の研究室の奥に住んでいる人たちであった」（中略）そして戦後の清水は，「羨ましい」と同時に「憎らしい」対象である進歩的知識人たちと，複雑な関係を結ぶことになった（同，32）。「複雑な関係」と小熊はいうのだが，筆者（土倉）は「微妙な関係」と言うほうが穏当ではないかと思っている。

さて，小熊によれば，清水は1984年の評論では，「主体性」について「私にとって最も興味のないこの問題」と評し，生活の再建が急務である敗戦直後の状況において，「悲劇の好きな一部の人々が作り出したこの観念は，果たして一般の青年たちにとって実際的な意義を有しているのであろうか」「エネルギーの恐るべき浪費である」と述べている。また『わが人生の断片』では，丸山や梅本を始めとした「戦後に知り合った友人たち」を「官立大学の奥深く住んでいて，敗戦の後に初めて発言するようになった清純な人たち」と形容し，「その人たちの言葉は，いつも少し大袈裟に聞こえた」ので，「万事を斜めに見て」「好んで冗談を言っていた」と回想していた（33-4）。小熊は続ける。

しかし1950年ごろから，こうした状況は変化した。占領政策の逆コースや朝鮮戦争の勃発によって，国内および国際情勢はにわかに緊迫化した。論壇の主

要テーマも，主体性や近代的人間類型といった内面的なものから，平和や民族独立といった政治的な問題に移っていった。ほぼ同時に，1949年の中国革命の成功を画期として，西洋近代を理想化した啓蒙主義や「近代主義」が批判され，アジアと日本の庶民感情や伝統文化，そして「民族」の再評価が唱えられた。こうした状況の変化のなか，清水は岩波書店の吉野源三郎が組織した知識人グループ「平和問題談話会」の主要メンバーとなり，「庶民の生活」の立場から「時代の危機」を訴える論者として，論壇の脚光を浴びてゆくことになる（34）。

余計なことかもしれないが，小熊の見解に対して，私見では少し違和感がある。ポイントは吉野源三郎である。吉野がはじめに「平和問題談話会」を組織するにあたって，最初に相談に行ったのは，清水であり，並行して安倍能成や小泉信三にも相談したのであるが，憶測するに，安倍，小泉は「お飾り」であり，実質的に「平和問題談話会」をリードしたのは吉野と清水であったのではないか。さらに言えば，清水の回顧に，のちに日高六郎から「あの時期の清水さんは精彩を欠いていた」と評された（34-5）というのも，清水のレトリック臭いと思われてならない。ただし，小熊の次のような論述はある意味で秀抜である。脱帽してもよい。

小熊によれば，清水を平和問題に熱中させた動機は，皮肉なことに，談話会のメンバーたちへの反感だった。声明をまとめるため談話会の各部会に参加した清水は，学者たちの態度を批判して，「みんな objectivists とでもいふのか，シニックな口調ばかり。ガッカリする」と日記に書いた。清水にとって，敗戦直後の貧困な庶民生活を高みから眺める「インテリ」たちの態度は，許しがたいものに映った。これ以後，彼はオールド・リベラリストを交えた談話会の穏健な声明にあきたらず，より戦闘的で社会主義色の強い平和論に傾斜することになる（37）。

清水は，大塚久雄に代表されるような，主体的精神の育成によって経済を復興しようという議論を批判する。人間の意識は，主体性といった内面から決められるものではなく，生活状況や社会体制といった外部環境に規定されている。それゆえ，平和のスローガンだけでは無力であり，平和を保証する経済体制を

築かねばならない。そのための手段は，社会科学を活用して生活を向上する，「社会主義化の方向」である。すなわち「貧しい家計こそ計画化を必要とする」のであり，ロシアが社会主義化したのも平和を訴えながら金銭を得るという清水の姿勢も，彼の社会主義観とおなじく，きわめて「庶民的」であったといえる（43）。

小熊のコメントは，少し偏見があるとまでは言わないが，やや図式的である。例えば，小熊は清水の著作から引用しながら次のように述べる。

清水が有名になるにしたがい，論評や似顔絵などがマスコミに掲載されるようになった。当時のマスコミでの清水の評価は，彼自身の要約によれば，「秀才である」「雄弁である」「長身である」「お洒落である」「名文家である」「江戸っ子である」「庶民的である」といったものが多かった。だが一方で，「偽物である」「信用するのは危険である」「下心は見えている」というのも少なくなかった（44；清水 1993，346）。

私見では，清水は偽悪家のところがある。そこが庶民だと言うべきではない。「清水が有名になるにしたがい」に関する小熊の主張については，清水が前掲引用箇所のすぐ後で言っている以下の引用だけで十分ではないかと思う。

清水はこう言っている。スクラップ・ブックの頁を繰っているうちに，昭和27年４月28日附の『図書新聞』の切り抜きが出て来た。それには，図書新聞社が行った読者世論調査の結果が発表されていて，大学生および高校生から寄せられた3490通の回答が整理されている。「どういう雑誌を愛読していますか」という質問に対する回答は，（1）『世界』（671），（2）『文藝春秋』（490），（3）『中央公論』（230），（中略）次いで，「どんな人に書かせたいか」という質問に対する回答は，（1）清水幾太郎（69），（2）中野好夫（57），（3）山本有三（35），（中略）……（清水 1993，346）。清水によれば，「誰でも『世界』が第１位を占めていることに驚くであろうが，あの頃の『世界』は，日本人の素直な愛国心と通い合うものを持っていた（清水 同）が重要なポイントである。すなわち，前述のように，『世界』編集長吉野源三郎と清水が組織した知識人グループ「平和問題談話会」は戦後史において大きな位置を占めているからである。余

計なことながら，それに論及した小熊は，「『庶民の生活』の立場から『時代の危機』を訴える論者」（小熊 2003，34）と清水を評したが，いささか語弊があると思う。

さて，清水が初めて内灘を訪れたのは，1953年5月に，総評の依頼で視察に加わったことによってだった。しかし清水は，雑誌『世界』に書いたレポートで，現地に到着したさい，そこが「火事場」であり，「火事場は，見学や視察のために存在するのではない」ことを悟ったと記した。（中略）かつて火事場見物を好んだ清水だったが，もはや見物ではすまないと感じた。清水はレポート「内灘」で「内灘だけは困る」という村長の意見を肯定し，「エゴイズム以外に反対する原理がないとしたら，エゴイズムで良いではないか」と述べた（同，49-50）。

ここで，視点を変えて，清水の学者としての側面を語るエピソードを紹介してみよう。経済学者根井雅弘は，彼のある1冊の著書のなかの「プロローグ――清水幾太郎先生のこと」という感動的な短文を書いている。一部引用してみよう。

> もうずいぶん昔になったが（まだ大学生になる前だったと思う），ある日，社会学者の清水幾太郎（1907-88）から1冊の本が献本されてきた。突然のことで内心驚いた。もちろん，私はそのころ清水先生（私にとっては恩師の1人なので先生と呼ばせていただく）の本に魅了されて，ファンレターのようなものを封書で送ったことはあった。読んだ本とは，『現代思想（上・下）』（岩波書店，1966年），『倫理学ノート』（岩波書店，1972年），『戦後を疑う』（講談社，1980年）など数冊である（根井 2019，7）。
>
> ところが，先生の訳書である E・H・カーの『歴史とは何か』（岩波新書，1962年）に添えられた手紙を読むと，「あなたのような若い読者がいたのを知ったのはとても嬉しかった。一体，どういう勉強をして私の本に辿り着いたのか？機会があればぜひ私の研究室を訪ねてほしい」というような趣旨が書かれてあった（同，8）。

それから数ヵ月後，怖いもの見たさで，野口英世記念館（新宿区大京町）にある研究室を訪ねることにした。本の挨拶程度で辞去するつもりが，いつの間にか，数時間も話し込んでいた（同8）。

私が清水氏に質問したかったのは，もっと単純なことだった。「なぜ先生はこれほど広い分野の学問に通じ，膨大な著作や翻訳などを量産できたのか？」と（8）。

「大学を追い出されたとき，物書きとして食べていかねばならなかったが，依頼される文章は誠に多様で，専門の社会学に関係があるかなどと考えている余裕はなかった」（9）。

清水先生は，60年の安保闘争に敗れたあと，書斎に戻り，『倫理学ノート』を頂点とする物書きに専念し，それからまもなく『戦後を疑う』のような「保守派」の論客として論壇に再登場していたが，少なくとも私に対する態度や言葉遣いは誠に「リベラル」で，世間の評判とは違っていた。実は，世の中に「リベラル」で通っている学者や評論家のほうこそ，対人関係では「権威主義的」で全く「リベラル」ではない，という経験を何度か味わったけれども，そのことは措いておく（10）。

実は，「そのことは措いておく」ことができないからこそ，根井の文章長々と引用したのだが，結論を先取りすれば，清水もリベラルなら，根井も大学入学前の早熟な少年である。こういう少年と清水のような「物書き」が対面するところが日本の「戦後民主主義」ではなかったか，と思う。

とはいえ，日本の「戦後民主主義」と清水幾太郎の関係を論じるとすれば，どうしても「平和問題懇談会」と「60年安保」について看過することはできない。単なる学者でなく，現実の政治の世界にコミットした清水の生々しさが浮かび上がってくるからである。

ジャーナリズム史専攻のジャーナリスト出身の社会学者・歴史学者である奥武則は次のように述べている。

1946年５月号に掲載された丸山眞男「超国家主義の論理と心理」で雑誌と

して大きな注目を浴びた『世界』は，「新しい日本」が国際社会の中で，どのように位置取りをするのかが，論壇の最大の焦点になってきた状況と切り結ぶべく，論壇誌として果敢な取り組みを行っていく。（中略）平和問題懇談会を作り，さまざまな活動を展開したことが，そのもっとも大きな事例である。

この時期から，1960年の日米安保条約改定をめぐって空前の大衆的運動が起きた「60年安保」の時期まで，『世界』は大げさではなく，論壇誌のチャンピオンとして君臨する（奥 2007，84）

創刊間もなくから広範な読者に支えられることになった『世界』は，やがて「戦後進歩主義」あるいは「戦後民主主義」と呼ばれる陣営の拠点になっていく。その大きなきっかけが，平和問題懇談会だった（同，94）。

この『世界』の編集長が吉野源三郎だった。

1948年9月のある日，吉野源三郎は，英文で書かれたある文書を手にした。表題は「A Statement by eight distinguished Social Scientists on the Causes of Tensions which make for」，タイプライター用紙3枚ほど（同）。

「戦争を防ぐには，どうしたらいいのか」という問題意識のもと，8人の社会科学者が討議してまとめたものである。この年7月13日，パリのユネスコ本部から発表された。戦争は人間性の不可避的結果ではないというのが基調だった（94-5）。

吉野は，イデオロギーを超えた学者たちの協力に接して，「日本でも同じ試みが必要ではないか」と考え，精力的に動き出す（95）。

1948年9月，清水は，熱海の岩波別荘（惜櫟荘）で岩波新書として刊行する『ジヤーナリズム』（清水，1949）の原稿を書いていた。28日，東京からやってきた吉野に，ユネスコの声明を読ませられる（99）。

このタイプライター用紙3枚分ばかりの文書が，それから十数年間に亘る私（清水）の生活の多くの部分を決定することになった（同；清水，1993）。

前文および十項目から成る文書「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」は，私（清水）がそれを自分で書き，それを自分で擁護したことによって，何時か，私という人間の一部分になった。私は，それを自分で書かなかった人間，自分で擁護しなかった人間とは，何時か，少し別の人間になった（100；清水，1993）

平和問題談話会は，1950年３月号の『世界』に「講和問題についての平和問題談話会声明」を発表した。今回も清水幾太郎が起草した。前回の場合，ユネスコの声明を受けたものだったが，今回は平和に向けた日本の主体的選択にかかわっていた（101）。

『世界』編集長吉野源三郎の活躍が光ることが重要である。名文家清水は，そのお手伝いをしたといってよい。だが，朝鮮戦争の勃発は，「平和共存」どころではなくなった。奥武則はその推移を次のように記す。

平和問題談話会の２度目の声明は大きな注目を浴びた。談話会も単に雑誌に載せるだけでなく，内外に積極的にアピールする道を選んだ。声明は都留重人が英訳し，UP，AP などの外国通信社，主要国の大使館などに送り，国内では記者会見も開いて，内容を説明した（104）。

だが，船出した平和問題談話会は間もなく，国際政治の苛酷な現実に襲われる。1950年６月25日，朝鮮戦争が始まった。米ソの代理戦争にほかならなかった。東西両陣営の平和共存の必要性と可能性を説いていた平和問題談話会は，東アジアの地で冷戦が熱戦になってしまう事態に直面したのである（105）。

清水幾太郎は朝鮮戦争の勃発が平和問題談話会に与えた打撃を次のように語っている（106）。

この事件（朝鮮戦争の勃発）によって，平和問題談話会の立つ前提は一度に崩れ，講和問題に関する声明はすべて空しいものになる。平和問題談話会が，一方，共存の前提していた，その共存が，事もあろうに，私たちが恐れながら

美化していた社会主義勢力の側から破壊されたのである（106；清水，1993）。

とはいえ，〈主張する雑誌〉は，その姿勢を変えはしなかった。『世界』1950年12月号に「三たび平和について――平和問題談話会研究報告」が掲載される。平和問題談話会が新たな状況の中で論議を重ねてまとめたものである。前文を清水，第１，２章を丸山眞男，第３章を鵜飼信成が書いた（107）。

丸山が第１，２章を書いたことが重要である。

丸山は，1952年５月号の『世界』に，「『現実』主義の陥穽――或る編集者への手紙」を発表している。この論文で，丸山は，「現実」を所与のものと考えずに可塑的なものとして捉える思考態度を強調している。「三たび平和について」で展開された思考方法についての議論は，これを先取りしたものだった（108）。

平和問題談話会が主張した東西両陣営の平和共存は，事実としては実現していく。代理戦争（朝鮮戦争）の経験によって，米ソ両国は平和共存の方向を模索する（それは，核軍拡と核抑止の理論に基づく平和共存であり，軍拡競争は続くのだが）。

日本は，平和問題談話会の掲げた全面講和ではなく，単独講和の道を選び，高度経済成長－経済大国への道をひた走る（108-9）。

1951年９月４日から，サンフランシスコのオペラ・ハウスで対日講和会議が始まった。８日，日本を含めて49ヵ国が講和条約に署名した。中国は招待されず，インド，ビルマは参加を拒否した。ソ連，チェコ，ポーランドは調印しなかった。講和条約とは別に，日本は米国と日米安全保障条約を結んだ。冷戦体制のもと，日本は明確に米国の傘下に入る道を選んだ（112）。

ここでコメントすれば，全面講和の路線は，経済成長の妨げになったのだろうか，と稚拙な疑問がわかないでもない。後の後に，社会主義陣営の強権化が進むとは，当時考えられないような状況だったのではないかとも思われるのである。

さて，米国の傘下に入る道を選んだ日本の政治，そして論壇は次のように展開して行く。なかでも出色な，奥武則が注目する清水の言説に焦点を当ててみ

たい。

講和条約の締結後，平和問題談話会は事実上，解散状態となった。だが，談話会が３回にわたる「声明」「研究報告」で提示した方向は，論壇的にも，現実政治のレベルでも，護憲・改憲反対の原理的立場として生き続ける（120）。

そうした中で，清水幾太郎「内灘」（清水，1953）に触れたい。講和条約と日米安保条約がセットになって結ばれた後，日本で何が争点だったのかを教えてくれるレポートである（126）。

平和問題談話会の主要メンバーの１人として声明の起草などにかかわってきた清水だったが，その後の朝鮮戦争の勃発，単独講和，日米安保条約の調印という事態の変化の中で，新しい活躍の場を求めていたということになろうか。「内灘」の中で，清水はこう書いている（127）。

……内灘は，基地問題に対する私の眼を開いてくれた。私にとって，内灘は即ち基地であり，基地は内灘である。こうして，昨秋の旅行は，基地問題を私に突きつけ，突きつけることによって，私の一生に一つの刻み目をつける結果となった。私は，基地問題の中に，自分の義務を見た（128；清水，1953）。

知識人のリクツではなく，現に反米基地というかたちで，「米国」と闘っている大衆と直接連帯する。清水は，そこにのめりこんでいった。平和問題談話会に集まった大学教授たちが教壇で平穏な日々を送る中，清水は平和運動の闘士に変貌していった（128）。

1960年，日米安保条約をめぐって日本は空前の政治の季節を迎える（137）と奥は言う。と同時に，これは清水にとっても最高で，最後の政治の季節であったと言えるのではないだろうか？

『世界』は1959年４月号で，「日米安保条約改定問題」を特集する。〈主張する雑誌〉は，ターゲットを「日米安保」に定めたようだった。この後，矢

継ぎ早に，「特集」のかたちで，この問題を取り上げた（140）。

1958年4月，教職員の勤務評定が実施されることになった（143）。

この年10月には，職務質問など，警察官の権限を拡大する警察官職務執行法（警職法）改正案が国会に提出された（同）。

1960年1月19日，岸首相はワシントンで新安保条約に調印した（144）。

条約の内容がほぼ明らかになるとともに，1959年3月，安保条約改定阻止国民会議が結成された。警職法反対運動の方式である。だが，全国統一行動は警職法のときのようには盛り上がらなかった。「デートを邪魔する警職法」という分かりやすいスローガンがあった警職法に比べ，外交・安全保障問題は，人々の関心から遠かったのである。このころのことを，清水幾太郎が次のように回想している（144-5）。

> 昭和34年の夏頃には，「安保は負けだ」という呟きも耳に入っていた。「安保は重い」という言葉が挨拶のようになったのは，敗戦後14年経って，私たちの生活が敗戦直後の窮乏および混乱を何とか切抜けて，慎ましいながら，一種の安定に辿りついた証拠でもあると思う。多くの人々は，その小さな安定を崩したくない気持ちになっていたと思う（145；清水，1953）。

1959年11月27日，全学連主流派の学生らによる国会構内突入事件があった。当時，全学連では，共産党の指導から離れて結成された共産主義者同盟（ブント）が執行部を独占していた。ブント全学連はやがて「六〇年安保」の主役となるが，この段階では彼らの行動にたいしては「はねあがり」との批判が強かった。条約批准を審議する国会論戦も「極東の範囲」などをめぐって一見華々しかったが実りのあるものではなかった。「安保反対」の声を一気に高めることになったのは，1960年5月19日の自民党による新安保条約承認案の衆議院強行採決だった。6月19日にはアイゼンハワー大統領が訪日することになっていた。強行採決はこの日程に合わせたものといわれた。参議院の議決が得られなくとも5月19日に衆議院で承認された条約は30日後の6月19日には自然承認となる（145-6）。

5月19日の強行採決は沈滞気味だった反対運動を一気に昂揚させた（147）。

こうした事態を見通していたかのように，『世界』５月号に，清水幾太郎「今こそ国会へ―請願のすすめ」が載った（同）。

発端は，編集会議での吉野源三郎の発言だった（同）。

その日も吉野は，読者の手紙をもとに話を切り出した。その手紙は，「『世界』の誌面を読んでいて，安保改定がまちがっていることは分かった。東京ではデモをしていると聞くが，地方にいるわれわれはどうしたらいいのか」という内容だった。吉野は「これにどう答えるか考えたい。たとえば，国会に対する憲法上の請願権があるんじゃないか」と，編集部員に問題を投げかけた。

これを受けて，清水に原稿を依頼に行った。清水は「そんな生ぬるいことで，君，いいのかい」と語ったという。

より直接的な実力行使を主張していた全学連主流派に対する清水の肩入れをうかがわせるエピソードだが，清水の文章そのものは，見事なアジテーションになっている（147-8）。

今こそ国会へ行こう。請願は今日でも出来ることである。誰にでも出来ることである。……それは，一切の人間が有する権利である。……北は北海道から，南は九州から，手に一枚の請願書を携えた日本人の群れが東京へ集まって，国会議事堂を幾重にも取り巻いたら，また，その行列が尽きることを知らなかったら，そこに，何物も抗し得ない政治的実力が生まれて来る。それは新安保条約の批准を阻止し，日本の議会政治を正道に立ち戻らせるだろう（148；清水，1960）。

清水幾太郎にとって，「六〇年安保」は，丸山眞男や竹内好とはまったくちがうものだった。後年，清水は「私にとって，安保闘争というのは，battle（戦闘）ではなく，war（戦争）であった」と語っている（155，清水，1993）。「民主主義などどうでもよかった。ただ喧嘩に負けた口惜しさだけであった」（清水，1993）とうのが，清水の総括だった（155）。

1960年５月末，『世界』から原稿を頼まれた清水は，短い原稿を書いた。後年の本人の説明によると，「私の見るところ，本気で頑張っているのは全学連ぐらいなものである，という趣旨の文章であった」という（155；清水，

1993)。

この文章は編集長・吉野源三郎の決断でボツとなる。清水は,「この没書以来,『世界』は，私にとって最も遠い雑誌となった」と書いている。事実,1958年から60年までの3年間だけで，10回も『世界』に登場した清水の文章は，これ以後,『世界』から消える。例外は，学習院大学教授としてかかわりの深かった安倍能成（学習院院長）の追悼文（清水，1966）だけである(155-6)。

ここで，筆者（土倉）のコメントを挟みたい。単純化して言えば,「民主主義などどうでもよかった。ただ喧嘩に負けた口惜しさだけであった」と,「私の見るところ，本気で頑張っているのは全学連ぐらいなものである」という清水の発言は，明らかに暴言であり，失言である。

清水の原稿をボツにした『世界』編集長・吉野源三郎の決断は適正である。少しだけ，清水に同情すれば，それならなんで「今こそ国会へ」という原稿を依頼してきたのか，という清水の恨み言は分からないでもない。

さて，このあたりの事情を語っているのが，当時『世界』の編集部にいた安江良介の証言がある。聞き手の名前は明記されていないが，おそらく奥武則であろうと思われる。以下，その箇所を一部引用してみたい。

――当時，清水氏は反対運動の中で孤立していた？

安江　全学連主流派に近いところに行っていました。僕には非常に印象深い光景があります。あのころの『世界』の若手編集部員は，午前中は編集部で仕事して，午後はいろいろな反対集会を取材したりデモしたりして，夕方は岩波書店の労働組合員としてデモして，夜はそのまま国会周辺をずうっと取材しているという生活でした。樺（美智子）さんが亡くなった6月15日夜にも国会の外にいた。中でたくさんの学生が殺されている，大変だという情報が流れて来た。そのとき全学連主流派の指導部と一緒にいる清水さんに会いました。清水さんは僕の肩をポンとたたいて「それ見ろ，これでなきゃい

かんよ」と，ニコッとされた。そのとき瞬間的に僕は非常な違和感を持ちましたね（安江 1996，212-3）。

――改定を阻止できなかったという意味では安保闘争は敗北だったと言えると思います。当時の気持ちはいかがでしたか。

安江　鈍感なのか，敗北感はほとんどなかった。安保そのものについて言えば，やはり敗北だったかも知れない。しかし，政治的には，岸氏が倒れて，池田氏の柔軟対応戦略が出て来ざるを得なかったわけですから勝利です。吉野さんは当時「われわれは現実政治を仕事にしているわけではない。敗北をいうなら自分たちの論理と現実政治とを区分けして議論しなければならない。簡単に失望したりするのではなく，われわれの論理が論理の面において間違っていたかどうかをまず検証すべきだ」という意味のことを言われた。いかにも吉野さんらしい言い方なのですが，これはやはり大事な点だと思います（同，213-4）。

安保闘争に敗れ，岩波の『世界』から追われた清水は，その後，どうなるのか。その前に，上記安江証言に，筆者としては，一言だけコメントしておきたい。

すなわち，安江によれば，「それ見ろ，これでなきゃいかんよ」と，ニコッと清水はしたそうであるが，これは安江の思い違いかもしれないと断ったうえで，このエピソードは清水の真髄をよくあらわしていると思う。

Ⅲ．『ジャーナリズム』について

1．「解題」

「清水幾太郎（1949），『ジャーナリズム』，岩波新書５」について，清水の愛娘清水禮子は，この書が彼の没後刊行された『清水幾太郎著作集』第９巻の「解題」において，次のように記している。

ジャーナリズムを主題的に扱った独立の単行本としては，『ジャーナリズム』が最初であり，また唯一の作品である。例えば，「環境イメージ」の問題，即

ち直接的接触の世界と間接的接触の世界の関係といった『流言蜚語』（清水，1992）や「政治と虚言」（清水，1992）の段階で既に生れ，長年に亙り温め続けられて来た発想と，やはり長い年月の間に蓄えられた豊かな体験と知識とが，折を得て一挙に爆発し，コンパクトな１冊を生んだというべきであろうか。著者（清水幾太郎）自身気に入って，後になっても時折使う「コップと神との間」という比喩的表現もここで生まれた。（中略）また，綜合雑誌批判が次のような言葉で終わって行くことは，昭和10年代の初め以降の著者に見られる，日常的な慎しい問題の徹底した重要視というプラグマティックな態度がジャーナリズム論をも貫いていることを証するものである。禮子が言う「次のような言葉」を以下引用する。

「日々の問題を尊重せよ。よく日々の問題を解くことを得ずに，どうして時代の問題を解き，永遠の問題を解き得ようぞ。ジャーナリズムは日々の問題のために，そしてそこから時代と永遠とへ通じる道のあることを信ずるもののためにあるのである」（清水禮子 1992，375-6）。

清水禮子は次のように続ける。これは重要である。

しかし，（中略）『ジャーナリズム』は，著者の申出により、1950年２月15日発行の第４刷が最終版になった。需要の多かったこの作品を絶版にした理由については幾つかの推測が可能である。第１に，使用しているデータが加速度的に古くなっているのを気に懸けたのではないかということ。第２に，「讀者への言葉」の最後に見られるように，ジャーナリズムに対する扱いが寛大すぎると感じられたのかも知れないということ。（中略）。第３に，初期の岩波新書青版の１冊として眺めた場合，この作品が何か異質なものとして感じられたのではないかということ。青版の５冊目である『ジャーナリズム』は，岩波新書の青版というものが未だ１冊も存在しない状態で書かれた。『ジャーナリズム』が著者の手を完全に離れた後になって，最初の青版が出版されたわけであるが，初期の何冊かの中に置いた時，自らが作った青版全体のイメージに従って書かれたこの作品に著者自身が或る違和感を覚えたのではないかということである。『ジャーナリズム』の「讀者への言葉」が，「本書は，諸君がジャーナリズムに

ついて所有している常識と経験とを整理し統一したものにほかならぬ」（清水 1992，189）と語っているのに対して，11ケ月後に青版の27として出版された『愛國心』（清水，1950；清水 1992，3-125）の「讀者への言葉」は執筆の動機を，「讀者諸君のため，といふより，寧ろ自分自身の氣持を整理するため」（清水 1950，2；清水　1992，6）としているし，また，その後に書かれたり訳されたりした岩波新書が何れも，読者の平面に謂わば降りて行く方針を捨てている点は，『ジャーナリズム』の問題を考える時に考慮に入れる必要があると思う（清水禮子 1992，376-8）。

清水禮子が言うように，「読者の平面に降りて行く」方針を捨てたところは，清水の偉さだと思われる。筆者（土倉）の貧しい読書遍歴を顧みても，「岩波新書」には計り知れない恩恵を感じているのだが，清水がそのような方針を持っていたという点は，全然気づかなかった。

さて，絶版にした理由について，清水禮子の幾つかの推測で，第４の推測がある。彼女が，これが最大の原因ではないかと思われるとするのは，仮名遣い，文字遣い，及びそれらの混乱が堪えがたいものに感じられたのではないかということである，と言う。

すなわち，清水禮子によれば，『ジャーナリズム』は著者の作品中，現代仮名遣いに拠って出版された最初の著書であり，過去の著作において漢字で表されていた多くの言葉が仮名書きに変った最初の単行本である。しかし重要なことは，これが，著者自身の手によって作られ推敲された現代仮名遣いによる文章ではなく，然るべき密度の漢字を含む古典仮名遣いの「原文」が，著者の手の届かぬ段階において，手荒く，しかも可成り杜撰な仕方で無理に「平易」に変えられたらしいという点である。（中略）『ジャーナリズム』の印刷，出版の最終段階において何かが起こったことを告げるものと考えられる。（中略）『ジャーナリズム』の印刷，出版における異質なファクターの介在を暗示するものであろう（清水禮子 1992，376-8）。

清水禮子は続ける。清水は，1954年１月から『婦人公論』誌上に第２の自伝的作品である「私の心の遍歴」の連載を開始する。この連載は（中略）1956年

１月，『私の心の遍歴』（清水，1992）として纏められるのであるが，1955年１月号掲載分に（中略）次のような注目すべき言葉が見られる，と言う。

「……戦後の当用漢字と新仮名遣とは，私にとって，かなりのショックでありました。（中略）この間，私は，多くの友人から，頭が古い，と笑われました。反動的である，と非難されました」。

しかし，ここで（中略）重要なことは，（中略）「世間へ発表する文章は旧仮名遣」で書いていたと告げている点であろう。（中略）『ジャーナリズム』出版の際の異質な要素の介在を推測させる資料，無視や素通りを許されぬ資料であると思う（清水禮子　1992，379-82）。

さて，清水禮子は，清水が『ジャーナリズム』を絶版にした理由として考えられる最後の第５の要素は，1950年の前半には，前後関係から言って，著者の関心は既に『社会心理学』の方に向っており，『ジャーナリズム』が扱った問題の或るものは，『社会心理学』においてより良い仕方で処理出来ると考えていたのではないかということが挙げられる（同，391-2），と言う。同感である。

２．「序論」

清水は，『ジャーナリズム』（岩波新書５，1949）の「讀者への言葉」において，次のように述べている。

清水がこの本を書いたのは1948年９月。書き上げてしまってから，ジャーナリズムの世界には２つの事件が起こった。第１は，1948年10月１日から始まった日本新聞協會主催の新聞週間である。（中略）第２は，1948年11月１日から開始された新聞購讀調整事務所の活動である。言うまでもなく，これは新聞界における激烈な競争の再開を意味する。久しく人為的に抑厭されていた競争の幕がここに切って落され，各紙は用紙割當という枠の中で，１人でも多くの讀者を得ようとする衝動のままに商品としての面目を發揮し始めている。（中略）「私は来るべきこの競争を豫想しながら本書のあらゆる頁において競争による弊害について書いた。そして書きながら，やや苛酷ではないか，少し神経質過ぎはしないか，という氣がすることもあったが，今から思えば，むしろまだ言

い足りなかったとさえ考えている」(清水 1992, 189-90)。

「言い足りなかった」がポイントである。すなわち，ジャーナリズムの商業化をもっと心配すべきであったと清水は言っていたと思われる。

さて，清水は，『ジャーナリズム』の「序論」において，次のように述べている。

われわれの日常生活にとって，ジャーナリズムとは何であるか。多少大袈裟にいうなら，凡てである，と言うよりほかはない。(中略) ジャーナリズムはわれわれに生活の條件を與え，それに對するわれわれの態度や行動をも教える。換言すれば，ジャーナリズムはわれわれの生活の隅々まで浸し，これを支えているのである。われわれはジャーナリズムの作った世界にいる (清水 1992, 196)。

3．ニュース

清水によれば，新聞はその日その日の世界を，これに一定の構造と色彩とをあたえながら，われわれの前に置くのであり，われわれはそれによって世界を，自分の周囲を，自分が適應せねばならぬ環境を知るのである。われわれはこれ以外のルートによって知ることは出来ないのである。新聞社の整理部がある事件に7段とか8段とかいう大きな見出しをつけ，これを紙面のトップに置き，この事件について烈しい言葉を用い，詳細な報道を試みる時，われわれがよほどの用意と警戒とをもって臨まぬ限りは，この事件に自己の意識および關心の大部分を吸収せられ，それによってわれわれの前に現われる世界の姿が決定されることになる。これと反對に，まったく紙面に載らぬ記事はもとよりのこと，載っても下の片隅に小さく報じられた事件は，容易にわれわれの視野から，われわれの世界から脱落して，その事件は元來存在しないものであるかのごとく遇せられるにいたる。人間の意識の能力というものから見て，これはきわめて當然のことと言わなければならぬ。われわれの前にあらわれる紙面を作る整理部は，われわれの前に現われる日々の世界の姿を決定しているのである (清水 1992, 236-7)。

清水の見事な的確な要約と言うしかない。新聞社の整理部はかくも絶大なる権力を持っているのである。

清水は戦前の日本を顧みながら新聞社の編集者の果たす役役割と限界について，次のように述べる。

編輯者は讀者の關心および意圖を先廻りして察知し，これに應じて編輯する。これが基本的な道筋である。戦争中，國民が何に關心を寄せ，何を知ろうと欲しているかは，新聞社にははっきりと判っていた。だが實際に報道し得るものは，情報局の強制する狭い枠の内部にとどまらねばならず，それも情報局の要求する編輯方法にしたがわねばならなかった。讀者の關心の大部分は充足されぬままに殘らざるを得ない。讀者がいかなる關心をいだいていたかは，新聞社に集まる多數の投書からもわかるが，しかし當局の壓力は，新聞がこの關心に應えることを許さぬ。充足されぬ關心は，さきに見たように專ら會話という原始的形式を採用し，流言蜚語として，ゆがんだ表情をもって暗夜の街路を彷徨しはじめる（同，1992，244）。

4．資　本　家

清水によれば，現代のジャーナリズムは，特にこれを新聞という部面で捕えれば，途方もなく巨大な機構をなしている（同，248）。われわれは既に商品の世界へ入り込んでいる。原始時代におけるわれわれの祖先が種々の報道を無料で入手したのに反し，また例の遍歴ジャーナリストが乞食であったのと異なり，今日では一切のニュースは商品として作り出され，われわれは商品としてこれを購入する（255）。

5．政　治　家

ジャーナリズムの政治的側面はどうであろうか。清水はそのように問題を立てる。清水によれば，いかに馬鹿らしい報道でも，それが幾度となく眼前に提供されると，最後にはこれを信じ込むようになる。これは多くの人間がまぬかれることのできぬ弱點であろう。（中略）新聞，あるいは總じてジャーナリズ

ムは大衆に環境乃至はその代用品として環境のコピーを提供する。ただ事實を示すだけでなく，人間に對するその意味をも明らかにする。ジャーナリズムのかかる機能は必然的に大衆から一定の行動を要求する。尠くとも大衆が一定の方向へ動き出す條件を，動かずにはいられない刺激を与えるものである。一般に政治は多くの人々を一定の方向へ行動させようとするものであるから，この點から見るとき，ジャーナリズム，特に新聞の持つ政治的意義はきわめて大きいと言わねばならぬ（262）。

筆者（土倉）の小さなコメントであるが，清水がこのように書いた状況は変わったと言わねばならない。新聞購読者数は減ってきているからである。しかし，清水は古典的に以下のように考える。あながち間違っているとは言えないところに現代の問題があると言ってよいのではないだろうか。

清水は言う。新聞が本格的に生まれたのは，言うまでもなく，ヨーロッパの啓蒙時代であって，この時代の思想と空気が新聞に與えた影響は，今日にいたるまで若干の痕跡をとどめている。自己の欲求と思想とを現實の制度のうちに表現している支配者たちにとっては，新聞は，すくなくとも大衆を相手とする新聞は，さしあたってあまり必要でなかった。これに反して，新しい思想を求める人々，現存の制度のかなたに理想の世界を眺める人々，つまり變化を欲する人々は，ようやく生まれかけていた新聞のうちに強力な武器を見出した。内容は海外の事情に關する新知識であってもよかった。それだけで彼らの理想の火に薪を與え，現存の制度の見せかけの永遠性に傷をつけることができたからである（264）。

「新聞が，公然とあるいは内密に政治的武器として利用されはじめる時，支配者がまずこれに向って試みるのは，言うまでもなく，檢閲である」と清水は言う。そして，こう続ける。すなわち，檢閲が過度に厳格になる場合は，必ず流言蜚語が生じる。流言蜚語は，それがいかに印刷技術が進歩した時代であっても，原始時代の人間と同じく，もっぱら口頭の會話という通路に頼る。それには，印刷された言葉に固有な権威は缺けているが，それと同時に，檢閲が入り込む隙間を巧みに塞ぐことができ，これによって支配者の眼をのがれて走り

まわることができるのである（265）。

検閲を裏返すと宣傳ということになる。権力者は検閲するだけでなく自ら宣傳に手を伸ばす。清水はこのような問題について次のように結論する。すなわち，清水によれば，厳正中立で報道第一の新聞の方が，正面から宣傳呼號する新聞より，宣傳の手段として有効であるということが明らかになり，そしてもしこういう新聞があらかじめ大衆の内部に根を張っている古い價値や觀念に訴えるときは，その有効性はますます増大するということが判明する。もし宣傳の意圖を有する勢力が厳正中立の陰にかくれ，報道第一の原理の背後に身をひそめているとすれば，われわれはやすやすとその餌食になる。その危險はわれわれの身近のところに横たわっていると見なければならぬ（281）。

清水がこのように言い放った時から，かなり離れた世代の者から見ると，やや道義的な観察ではないかと思われるが，理解が及ばないのかもしれない。

Ⅳ．『倫理学ノート』について

清水の『倫理学ノート』（清水，1972；1993a；2000）は，清水の晩年の代表的な著作であるが，この書について，清水の愛娘清水禮子の手になる『清水幾太郎著作集』第13巻の「解題」（清水禮子，2000）から話を始めたい。

清水禮子によれば，「『倫理学ノート』は，60年に及ぶ清水幾太郎の執筆活動を20年ずつ３分割した場合の，第３の20年間，即ち昭和40年代半ば以降の期間に発表されたものの中では最大の重量を具えた作品である」（禮子 2000，382）。

この著作には特異な性格が備わっていると禮子は言う（同）。

⑴「昭和10年代以来，長期に亘り，様々な作品の中で種々の言葉で語られて来た基本的な主張の多くが，ここで更めて新鮮な明確な表現を与えられ，そのために，将来の作品を支える軸となる資格が準備された」（同）。

⑵「著者が自らの作品を語る時，『現代思想』（清水，1966b）の場合ほどではないにしても多少なりとも反省の破片を籠めている場合が多い」（禮子2000，383）。

⑶「『倫理学ノート』が憤りを籠めて突きつけている諸問題に対して，問題

を突きつけられた人々の側からしかるべき反応，或いは，几帳面な回答は未だ行われていないように思われる（禮子 2000，384）。

ここで私見を挟めさせてもらえば，(3)に強い印象を受けた。(1)にしろ，(2)にしろ，禮子は冷静に父を擁護しているが，筆者（土倉）にはそれほどの感銘は持てなかった。清水幾太郎言説の「読み」が，量においても質においても，とても十分であるとは言えないけれども。

(3)に強い印象を受けた理由としては，そこに，この有名な著作家，思想家の「孤独」を感じたからである。と同時に，『倫理学ノート』を読みながらも，無能な読者であることは十分わかったうえで言えることは，いささかの退屈感を感じざるを得なかったことも告白しておきたい。そうは言っても，『倫理学ノート』問題は重要である。浅学菲才な筆者であることは省みず，考察を続けてみたい。

さて，『倫理学ノート』初版刊行後28年，『倫理学ノート』を収めた著作集刊行後７年して，『倫理学ノート』講談社学術文庫版が刊行された。この文庫版の解説者は哲学者の川本隆史である。

川本はこの文庫版の巻末に「解説」として，「『倫理学ノート』私記――25年後の感想」という感動的なエッセイを記している。はじめに，このエッセイの文末部分から引用しよう。

> 最後に文庫化の経緯を記しておこう。３年前，講談社のシリーズ《現代思想の冒険者たち》の１冊として評伝『ロールズ――正義の原理』を世に出した時の産婆役が，稲吉稔さんである。彼が講談社学術文庫の編集部に移ってからしばらくして，電話で文庫に収録すべき名著がないかと問い合わせてきた。私は迷わず本書を挙げた。初版の出版元は清水の作品群を復刊するつもりもなさそうだし，かといって『著作集』は入手しにくい。清水が20世紀の倫理学に突きかけた問いかけとその後の試行錯誤を，今こそじっくりと検討してみることが必要ではないか。そんな思いを伝えたら，あれよあれよという間に出版の手はずが整えられた。今回の復刊によって，人間と倫理と科学

をめぐる思索の旅の仲間が増えること，そのことをかつての愛読者の１人として期待したい（川本 2000，471-2）。

筆者としてコメントさせていただくと，「私は迷わず本書を挙げた」と，「かつての愛読者の１人」は，矛盾するのではないかと思わないでもなかったが，よく考えてみると，それも一理あると思われる。

さて，清水自身が「奇妙な書物」と呼ぶ『倫理学ノート』の成立事情は，川本によればこうである。川本は次のように述べる。

作者自ら「奇妙な書物」と呼ぶ本書の成立事情に関しては，巻末の「余白」に説明がある。1949年，岩波全書のシリーズに『社会学概論』，『社会心理学』，『現代思潮』，『教育原理』および『倫理学』の５冊を執筆する依頼を受け，準備を始めた清水の前に G・E・ムアの『倫理学原理』（1903年）が立ちふさがる。「この面白くもなく，役にも立たぬ学説に忠実な解説を施さねばならぬのなら，『倫理学』など書きたくない。そう思って，私は計画を捨てた」。ところが同じ叢書で『現代思想』を書きあげた「心の弾みで」，『倫理学』の上梓を予告し，再びムア以降の英米倫理学の勉強を始めるが，やはりものにならない。そうした行き詰まりや当惑をそのまま書いてみてはどうかとの編集者の助言に従って，月刊誌『思想』に連載した19篇のエッセイ（1968年11月号から1972年４月号まで）に，「余白」という跋文を加えたものがこの『倫理学ノート』なのである（川本 2000，463）。

ところで，川本によれば，清水が「存命中に企画された『清水幾太郎集』宣伝パンフレットには，もっと強烈なモチーフが明かされている」（同，464）と言う。川本が引用したものは，重引になるが以下のような清水の文である。

「本書を貫いているのは憤りである。「善は定義出来ない」と冷たく言うムア，それに感激するケインズ，そこから生まれた今世紀倫理学の正統に触れた途端，私の憤りは爆発した。腹の立つ相手に不足はない。１万円札が貧乏な失業者に与える効用と，同じお札が百万長者に与える効用とを比較することは出来ない，

と言い，面倒な事柄をすべて「与件」として外部へ投げ出して，それでフォーマリズムを守る経済学者。限りなく厳密性を求めて，一切を論理的アトムに還元するラッセルや前期ヴィトゲンシュタインなどの分析哲学者。誰も彼も，人間の住む現実という灰色の湿地帯を逃げている。元凶はデカルトだ，と気づくと同時に，デカルト主義者からデカルトの敵に廻った転向者ヴィーコが私を慰めてくれた。「ポスト・モダン」の定義は知らないが，そこには私の憤りに似たものがあるのではないか（川本 2000，464-5）。

このような清水文の引用を終えた後，川本は次のようにコメントする。重要なコメントだと思われる。

短いながらも読み手の意欲を駆り立てる，見事な PR 文になっている。実際に刊行後６年足らずで５刷に達し，それなりの数の読者を獲得したはずの本書なのに，残念ながら倫理学の分野からの本格的な応答は見られなかった（同，465）。

ただし，川本は，清水の『倫理学ノート』刊行直後は，「主要な総合雑誌や新聞などは，こぞって書評にとりあげている」（465）としたうえで，次のように述べている。

では，初めて『ノート』を読み通した際に（読了は1975年６月24日）どんな感想を私（川本）が抱いたのか。出会いから25年経った今は，どのような距離をおいて同書に接するのか。そのことに触れておこう。ムアの『倫理学原理』をテキストにする演習に出て，その参考書程度のつもりで本書を手に取った私だったのだが，清水の「憤り」はけっこう腑に落ちた（467-8）。

けれども「余白」の末尾で清水が示唆する突破口は，うさんくさく思われてならなかった。すなわち，オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』を援用しながら，現代社会の構成員を「無理と知りつつ，敢えて自分に高い要求を課し，それへ向って生きる少数者」＝「貴族」と「自分に何一つ要求を課することなく，現にある自己のままで生きる多数者」＝「大衆」とに区分する。その上で「飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は，すべての『大衆』に『貴族』たる

ことを要求するところから始まるであろう。しかし，それが不可能であるならば，『大衆』に向って『貴族』への服従を要求するところから始まるであろう」と結論づける。ムア以後の倫理学や新厚生経済学の不毛さを暴き出していく部分に拍手喝采を惜しまなかった私でもここで唐突に持ち出される「貴族／大衆」の2分法にはついていけなかった（468）。

筆者（土倉）もついていけない。どうして，清水は唐突に飛躍するのだろうか。清水は自覚的に居直ったのだろうか？　筆者はそうではなくて清水の潜在意識が突如露出したと思いたい。言いかえれば，清水は自分のことを指導者であり，「エリート」なのだと強く信じているのだと思いたい。その意味で，川本が「現代の倫理学に残された道は，大衆批判と功利主義，つまり『立法者，指導者，エリートのための倫理』という路線しかないのか」という清水批判に同感である。川本のこの鋭い一刺しに続けて，川本は次のように述べる。

もう一つ，晩年の「転向」についてだけ付言しておく。自らが唱導してきたはずの戦後的な価値観をまるごと否定するようなナショナリスティックな言説に関して，地金が現れただけだと受け流すことはできないし，ポスト冷戦下の民族主義や保守回帰ムードの先取りと受けとめるのも短絡過ぎよう。私が注目したいのは，三木清が昭和研究会の内部討論を踏まえて執筆した2つの文書（『新日本の思想原理』1939年1月，『新日本の思想原理　続編――協同主義の哲学的基礎』同年9月）の落差について，清水がこう分析している箇所である（470）。

こういう態度の変化〔＝「及び腰」からの脱却〕は，或る部分，続編の主たる内容が彼の専門である哲学の諸問題であるためかとも思われるが，しかし，大部分は正篇を書く過程を通じて，また，それを書いたという事実によって彼自身が変化したためであろう。これは，私自身，戦後の平和運動の中で幾つかの文書を自分の手で作った経験に照らして，大きな誤りはないと思う（470-1；清水 1993c）。

川本は上記のような清水の文章を引用したあと，次のように「こう私は臆断

している」(471) として，次のように述べる。

> 清水もまた「天皇論」(1973年)，「戦後の教育について」(1978年) を書いていくプロセスで自らを変化させていったに違いない。しかも若くしてジャーナリズム業界で名を成した彼の周りには，取り巻きやファンはいても，本人の筆の走りを嗜めたり，思考のぶれを正してくれるような友だちがほとんどいなかったのではないだろうか。清水の「転向」の背景には信頼できる友人の不在があった (471)。

この点につき，川本が「ユニークな試みとして以下の論評を追加しておきたい」(471) とする武者小路公秀の言説を紹介しておきたい。武者小路はこう述べる。

> 丸山政治学が，政治におけるフィクションの発見を，近代政治の出発点としたのに対して，清水社会学（そして清水倫理学）はこのフィクションの形式化を，日本共産党から日本国憲法までじゅっぱひとからげに否定して，内容が曖昧であるだけにシュールにも似た無定形性をもった天皇主義への帰依に移行した（武者小路 1995，91）

「シュールにも似た無定形性」とは，鋭い観察だと思う。さて，「最後に文庫化の経緯を記しておこう」(471) と川本は次のように述べる。

> 3年前，講談社のシリーズ《現代思想の冒険者たちの1冊として評伝『ロールズ――正義の原理』を世に出した時の産婆役が，稲吉稔さんである。彼が講談社学術文庫の編集部に移ってからしばらくして，電話で文庫に収録すべき名著がないかと問い合わせて来た。私は迷わず本書を挙げた (471-2)。

さて，川本はロールズを専攻しているが，筆者（土倉）はロールズについて何も知らなかった。そんな折り，読書雑誌『図書』に国際法学者西平等がロールズについて次のように書いていることを見つけた。西はこう述べている。

> あらゆる利用可能な手段を用いて無法国家をこの世から消し去る，というような殲滅的な戦争が出現しないためには，理想が理想であるということを常に

意識し，現実には私たちもまた全きリベラルではありえないという自覚の下で，『万民の法』を読みといていくべきだろう。それがロールズのリベラルな読み方だと思う（西 2022，31）。

川本によれば，「ロールズは相性が悪い」と清水は打ち明けている（469）そうであるが，言い得て妙である。

参考文献

奥武則（2007），『論壇の戦後史　1945-1970』，平凡社新書。

小熊英二（2003），『清水幾太郎　ある戦後知識人の軌跡』，御茶の水書房。

川本隆史（1997）『ロールズ：正義の原理』，講談社。

――――（2000），「『倫理学ノート』私記――25年後の感想」，清水幾太郎，『倫理学ノート』，講談社学術文庫，1993，459-75頁。

酒井隆史（2022），「この民主主義を守ろうという方法によってはこの民主主義を守ることはできない：丸山眞男とデモスの力能」，『世界』2022年11月号，86-93頁。

清水幾太郎（1949），『ジャーナリズム』，岩波新書５。

――――（1950），『愛國心』，岩波新書27。

――――（1953），「内灘」，『世界』９月号。

――――（1960），「いまこそ国会へ――請願のすすめ」，『世界』５月号。

――――（1966a），「安倍能成（学習院院長）の追悼文」，『世界』９月号。

――――（1966b），『現代思想』（岩波全書）（上，下），岩波書店

――――（1972），『倫理学ノート』，岩波書店。

――――（1992a），「流言蜚語」，『清水幾太郎著作集』第２巻，講談社。

――――（1992b），「政治と虚言」，『清水幾太郎著作集』第６巻，講談社。

――――（1992c），「愛國心」，『清水幾太郎著作集』第８巻，講談社，3-125頁。

――――（1992d），「ジャーナリズム」，『清水幾太郎著作集』第９巻，講談社，187-312頁。

――――（1992e），「社會心理學」，『清水幾太郎著作集』第９巻，講談社。

――――（1992f），「私の心の遍歴」，『清水幾太郎著作集』第10巻，講談社。

――――（1993a），「倫理学ノート」，『清水幾太郎著作集』第13巻，講談社，3-394頁。

――――（1993b），「わが人生の断片」，『清水幾太郎著作集』第14巻，講談社，3-498頁。

――――（1993c），「三木清と昭和研究会」，『清水幾太郎著作集』第14巻，講談社，326-328頁。

――――（2000），『倫理学ノート』，講談社学術文庫。

――――（2011），『流言蜚語』，ちくま学芸文庫。
清水禮子（1992），「解題」，『清水幾太郎著作集』第９巻，講談社，367-394頁。
――――（1993），「解題」，『清水幾太郎著作集』第13巻，講談社，365-386頁。
寺島実郎（2022），「近代民主主義の成立要件と21世紀の模索――資本主義と民主主義の関係性」（その３），『世界』2022年11月号，70-4頁。
西平等（2022），「リベラルな理想の世界とリベラルでない現実の私たち――ロールズ『万民の法』をどう読むか」，『図書』，岩波書店，28-31頁。
根井雅弘（2019），『経済学者の勉強術　いかに読み，いかに書くか』，人文書院。
武者小路公秀（1995），「書かれなかった名著――清水幾太郎著『倫理学』岩波書店，197X年――」，『明治学院論叢　国際学研究』第13号，89-91頁。
安江良介（1996），「『六〇年安保』をめぐって――安江良介氏に聞く」，毎日新聞社編『岩波書店と文藝春秋』，210-5頁。
ウォーラーステイン，イマニュエル（川北稔訳）（2022），『史的システムとしての資本主義』，岩波文庫。